

# 蘇芳集

春炬燵

青山

丈

皿二つ 鶯餅の 一つづつ  
駄を出てすぐ公園の梅白し  
人を見て水を出てくる春の鴨  
葉牡丹の鉢二つ見て二つ買ふ  
咲き出してそれは普段の椿かな  
卓の上 彼岸の卵ころがれり  
剥いた皮まだ置いてある春炬燵

春の鴨

小川美知子

雀きよろきよろ鳩がきよろきよろ春立ちぬ  
さびしくて熱など測る春の暮  
紙よりも乾く手のひら白椿  
春寒し小さなこゑで雨が降る  
まつさをな空のどこかで囀れり  
戦争が始まつてゐるうすごほり  
春の鴨いつも向かうの方にある

胸中に

木内憲子

蒼天や雪後の風のつぶて打ち  
胸中に一書閉づれば枯深し  
木の芽張る日々の葉を日々飲みて  
鳥を映してあたたかな水溜り  
抱へ購ふ文具いろいろ春立つ日  
恋猫の夜がうつとりとしてきたる  
二月逝く夜は強燭にも書きて

汁かをる

小島みつ如

汁かをる幼なの呉れしふきのたう  
紅梅を嗅がむとすれど口付けに  
畑みちや老白梅も朝日抱き  
春粉雪窓に施設の湯浴みかな  
春遅々と腕のはがゆき球技また  
ブラームスの恋の曲想うらけし  
スケート観戦夜の服薬忘れ

別れ

清水裕子

ウインドーの服みる心春めきぬ  
コーヒーにミルク渦巻く春祭  
初蝶の影引く高さ野面過ぐ  
蛸蚪生るる数へきれざる波紋かな  
旧邸の石に文様利休の忌  
川音の闇に吞まるる利休の忌  
幾度も振り向く別れ梅白し

年の豆

下平直子

今すこし住む家なるぞ豆を撒く  
年の豆母の齢へまだまだや  
裏口の昨夜の豆を掃いて春  
春雪の光もろとも青菜引く  
路地たのし戸毎の春の雪だるま  
新しきノートの匂ふ春の卓  
春めくや買物籠に菜のあふれ

こんこんと

富田正吉

大風に椿を降らす椿の木  
椿までさんざん歩く時間かな  
こんこんと椿の眠る星の夜  
あざやかに時過ぎてゆく椿かな  
玉椿肩を揉まれてをりしかな  
母憶ふゆゑに椿は灯のごとし  
師も父も椿を詠めばわれもまた

桜情報

野路 斉子

水の香

前田 陶代子

芽吹きゐるらしひそひそと森の声  
風を飛ぶ紋白蝶の鉄の意志  
不確かな情報さくら咲くといふ  
あれこれは云はず陽炎立つ中に  
桜咲く歩けば歩いただけの分  
みつともない程に慌てて桜散る  
ゆく春の螺旋階とは非常階

露の臺

別府

優

投げ入れの間に通さるる成人日  
漂着のごとく雪後の猷血車  
雪掻きの音の遠のく寝しなかな  
生き方の今いくとほり露の臺  
啓蟄の音たててゐる椅子の脚  
梅挿して煮炊の閑の虚ろかな  
知る人と知らない人と雛を見る

汲み置ける水に水の香春立てり  
余寒なほ開きて白きたなごころ  
芹青む一縷の水のひかるなり  
落つることためらつてゐる紅椿  
天水の空のさざ波鳥帰る  
青きもの茹で浅春の夕厨  
中天の月のまどかや涅槃寒

うすらひ

峰岸

よし子

校舎より論語の素読寒明くる  
ひる過ぎの日ざしが肩へ梅ふふむ  
梅白しうしろの闇のかぶさり来  
風に咲き風に散りゆく野梅かな  
春寒しレモンの種を匙が追ひ  
落雁のほろりとくづれ春の雪  
うすらひの流るとなく向き変はる